

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：森 仁志

本論文はハワイに住むいわゆる「混血」(ミックス)の日系アメリカ人四世の若者のエスニシティ意識を主にフィールドワークを通して考察したものである。上記の論文要旨にあるように、2000年度のアメリカ合衆国国勢調査(U.S. Census)によると、ハワイ州の「混血」の人口は、州全人口の21.4%を占めており、合衆国全体の「混血」の人口が2.4%にすぎないことに比較して大きな特徴となっている。また、ハワイ州の保健局が独自に行う調査によると、ハワイの「混血」人口は州全人口の3分の1以上にのぼるとも推定されている。とりわけ、「パートジャパニーズ」と呼ばれる、日本人移民を祖先に持つ混血の人口は若い世代に増えており、ここ三十年ほどに出生した「日系人」と呼ばれる人々の大半は「混血」である。本論文の最大の焦点は、これら「混血」の若者のエスニシティ意識を考察することで、エスニシティの境界の形成・維持・転覆について分析することである。

「混血研究」いわゆるマルチレイシャルスタディスは1990年以降のアメリカでとりわけ盛んになった。そこには従来の固定的な人種・エスニシティ研究に揺さぶりをかけ、人種やエスニシティの社会的構築性を確認しようとする意図があるのみならず、複数の血を引く「ミックス」の人々こそがグローバル化する社会のなかで登場した(あるいはすべき)新しい人種・エスニシティ関係を体言する存在なのだという主張もみられた。しかし同時にミックス研究は、その意図とは逆説的に、人種やエスニシティの存在を所与のものとし、固定的な境界線意識を基にしているという批判もなされてきた。本論文はこのような理論的な論争を、先住民に加え、植民者である白人、あるいはアジア、ラテンアメリカ、ヨーロッパなどから移民が多く住み、いわゆる「異人種・異民族間結婚」の多いハワイに焦点をあて、エスノグラフィを通して具体的に検討するものである。そして、ハワイの「混血」の若者たちは、マルチレイシャルスタディスが提言するような、人種やエスニシティ意識の解消や融合という方向に向かうのではなく、むしろ比較的固定的な人種やエスニシティ観を維持し、それらを状況に応じて使い分けることを描出する。つまり、「混血」と呼ばれる人々が従来の人種やエスニシティ観を必ずしも転覆させる主体ではないことを示すと同時に、固定的な人種やエスニシティ観がかれらに選択的に使われていることを具体的に示すことで、そのような概念の社会的構築性を逆説的に浮かび上がらせることにも成功しているのである。このように、本論文は最新の先行研究に対する鋭い批判的視座を提供する一方で、旧来の人種やエスニシティの本質論へ逆行するわけではなく、むしろ本質と構築という二者択一の観点とは異なる視座から人種やエスニシティ観の形成と維持、変容について考えている。またこれに関連して、本論のもう一つの強みは、人種やエスニシティについて中心的に論じながらも、若者たちの日常的な実践や語り注目することにより、人種、エスニシティ、階層、

セクシュアリティ、ローカリティといった社会的アイデンティティの交差や相互作用を描き出したことにある。社会的アイデンティティの交差については、マルティレイシャルスタディスの分野でも理論的には指摘されてきたが、本論は、具体的な民族誌の中でそれらの論点を検証し考察することに成功している。

本論文は、マルティレイシャルスタディス、およびハワイにおける「混血」研究を概観した序論に続き、一章以降はフィールドワークで得られた具体的な事例の分析で構成されている。これらの事例の記述は本論文が高く評価される理由のひとつである。著者はごく少数の対象者と徹底的に時間を過ごすことで、従来の先行研究ではまったく論じられていない若者たちの行動や思考を追った。とりわけビーチやバーなどで共に「遊び続ける」という行為を通して、インタビュー調査などでは得ることのできない、普段の日常生活の中でのかれらの実践や語りに迫ったのである。エスノグラフィの内容は詳細で具体的であり、非常に興味深い観察に満ちている。むしろ、著者はエスノグラフィを巡る様々な近年の理論的な問題も十分に意識しており、本論文には彼が「書く」文化がいかに評価されるべきかについての論考も含まれている。

査読者から大きく分けて三つの課題が挙げられた。まず、本論文の学術的な位置が曖昧な点。つまりこれは人類学なのか、北米地域研究なのか、クィアスタディスなのか、ポリネシア研究なのか、あるいはエスニシティ研究なのか。学際的な論文であるために、それぞれのディシプリン、あるいはフィールドから考えると、先行研究の整理や考察がいささか不足している面があると指摘された。また対象者のアイデンティティを論じる際に用いられる分析枠組みが、多少図式的で単純になりがちである点も指摘された。さらに結論部分で著者は主にエスノグラフィの理論的問題の考察に終始しているが、これはとりたてて新鮮味がある議論ではなく、むしろ自らのフィールドワークの結果を全面的に押し出して論文を終えるべきだったという批判もなされた。

このような課題を残しているものの、査読にあたった教員は本論文のエスノグラフィとその理論的な知見を高く評価し、全会一致で博士の学位を授与するのに十分と判断した。